

ドイツにおける子ども達の参画を促す保育者研修の実際と 参加者の意識が意味するもの

Die Praxis der Fortbildung für pädagogische Fachkräfte zur Förderung der
Partizipation von Kindern im Vorschulalter in Deutschland sowie die
Bedeutung des Bewusstseinsstandes der Teilnehmer dabei

船 越 美 穂

Miho FUNAKOSHI

(幼児教育講座)

(平成29年9月21日受理)

I. 問題の所在と研究の目的

筆者はこれまでドイツの保育施設における子ども達の参画について¹, 主としてバイエルン州とシュレーズヴィヒ＝ホルシュタイン州の保育施設でのフィールドワークで収集した実践とインタビュー, さらにカリキュラム分析を通してその特徴を明らかにした(船越 2012, 2013, 2015)。さらに, 保育施設における子ども達の参画は, 多様性を重視する教育によって支えられていることを明らかにした(船越 2016)。この様な状況の中, バイエルン州では, 準備コースドイツ語 240 の対象が, 移民の背景を持つ子ども達のみであったのが, 2013 年より言語支援を必要とするすべての子ども達対象へと拡張された。ここには, 多様性尊重とインクルーシヴ教育への対応の影響が見られる(船越 2017-1, 2017-2)。

子ども達が保育施設の日常に積極的に参画するためには, 大人の子ども観と姿勢がまず問われる必要がある。筆者はこれまでミュンヘン市のある保育施設における移民の背景を持つ母親達への支援について参与観察とインタビュー, 及び関連資料によって調査を行い, 母親と子ども達への影響について明らかにした(船越 2017-3)。

本論では, 子ども達の保育施設における参画に最も影響を及ぼす大人として, 保育者に焦点を当てて考察する。家庭から保育施設への移行に始まって, 就学に至るまで, 保育者は保護者と連携

しながら乳幼児期の子ども達の保育の責任を担う。そういう意味で, 保育者は子ども達の人生のスタートに立ち会うわけで, 多大な責任を担っている。

バイエルン州幼児教育計画(以下, BEP と略)によると, 子ども達の参画は同時に親, 保育者集団の参画を要求する²。つまり, 大人と彼らによる他者との付き合い方は子ども達にとって常に模範であり, 刺激なのである³。BEP では保育施設の中に参画文化を醸成していくことを説いている⁴。保育者集団の中で, 園長のイニシアチブとマネジメントの元, 多くのことは共同決議されねばならない⁵。保育者集団における参画は, 子ども達の参画にとっての基盤なのだ⁶。それは, 保育者集団の中で, 定期的に自らの教育的自己理解について省察し, 教育活動を作りあげることが前提とする⁷。つまり, 保育者は自らの子ども観の省察をしなければならない。BEP では, 「参画は自己の子ども観の反省によって始まる」⁸と述べている。

保育者が自らの子ども観について省察し, 新しい知識を獲得し, 明日からの保育を構築するための機会として保育者研修のあり方が問われなければならない。筆者は 2016 年に 2 度にわたってドイツの保育者研修に参加した。本稿では, 筆者が参与観察したドイツの保育者研修の内容を提示し特徴を明らかにする。また, 研修の中で保育者対

象に行ったアンケート結果を分析することによって、保育者による参画の捉え方について検証する。さらに、筆者が日本の保育者研修の中で実施したアンケートを分析することによって、日本の保育者の抱える問題を明らかにするとともに、ドイツの保育者研修に関連付けながら、今後の日本における子ども達の参画を促すための保育者研修の課題を提言したい。

Ⅱ. ミュンヘン市立保育施設 A における研修

2016 年 6 月 2 日及び 3 日の二日間、ミュンヘン市立幼稚園の保育者対象の研修会に参加した。場所はミュンヘン市立保育施設子どもたちの家 (Haus für Kinder) と命名されている、0 歳から就学までの子ども達対象の施設であった。研修テーマは、「オープンな園：共同決定、共に、互いのための場所」であった。講師はこの園の園長と年長児担当リーダーの保育者であった。主催はミュンヘン市教育スポーツ局教育研究所であった。

1. 保育者研修の概要

(1) 園について

研修をした園の在籍児数は 101 名である。年齢内訳は 0 歳から 3 歳未満児 36 名、3 歳から 6 歳が 65 名、障害を持つ子どもが 5 名である (2016 年 6 月現在)。移民の背景を持つ子ども達の比率は 25 パーセントである。一階と二階の二つのフロアに分かれてオープン保育を行っている。参画とインクルージョンを重点目標にしている。

(2) 研修内容

研修時間は 2 日共、8 時半から 16 時 15 分までであった。初日は最初に円形になる様に腰掛け、二人一組で自己紹介をしてから、全員に向かって他己紹介を行った。

① 保育施設の説明

この園はオープン保育を実施している⁹。従って、研修の目的は「オープン保育」について学習することであった。園長は園の特徴についてパワーポイントによって説明を行った。参加者は疑問や質問があれば、その都度発言するため、説明が中断することがしばしばあった。何度も発言したのは、保育者歴の長い参加者達であった。年長の保育者にとって、オープン保育は自分がこれまで経験してきた保育方法とは大きく違っているの、関心がある反面、多くの疑問が噴き出してきたようであった。しかしそれだけ参加者が研修

テーマについて興味関心を抱き、真剣に向き合っていることが明らかとなった。講師は説明が中断しても丁寧に応答をしていた。

② 保育見学

グループに分かれて、保育見学をして、オープン保育の特徴を把握した。筆者はプロジェクト活動のテーマ決定の場面を見学した。この保育施設では、一週間に一回、4～5 歳児が集まってプロジェクト活動に取り組んでいる。これまでのプロジェクト活動「パン屋さん」が終わったため、この日は新しいプロジェクトテーマを決めることが課題であった。11 名の子ども達が 3 名の保育者のもと、最初は赤いカーペットに座布団を敷いて座る態勢で話し合った。次にリクエストをあげた子ども達は黄色いシートの上で、紙に色鉛筆でプロジェクトで取り組みたいテーマを絵で描いた。子ども達は、船、サッカー、動物園、自動車修理工場、飛行機、ジャングルを候補としてあげた。次に、子ども達は一人ずつ、ブルーのシールを 2 枚もらって、自分が希望するテーマが描かれている絵に貼って投票した。保育者にも 1 票投票権がある。保育者が投票した後、全員で結果を確認した結果、「飛行機」に決定した。保育者の司会のもと、今後のプロジェクトの見通しについて確認した。以下、子ども達の会話について紹介する。

子ども「飛行機を見に行く?」

保育者「ドイツ博物館へ行こう」

子ども「整備場へ行きたい」

子ども「テレビ番組でやってたので行けるかもしれない」

保育者「幼稚園では何ができるかな?」

子ども「飛行機を探す」

子ども「ダンボールで作ったりする」

保育者「図書館で調べることもできるね」

子ども「家にある見本を持ってくる」

子ども「操縦士の仕事について調べる」

子ども「副操縦士の仕事について調べる」

保育者「パイロットがいたら、幼稚園へ来てもらってもいいね。パパとママに聞いてみて。フライトアテンダントかパイロットを知ってるかって」

一人の子どもの親が空港で働いていることが分かり、聞いてもらうことになる。

子ども「プラスチックの飛行機を持ってくる」

保育者「飛行機の載っている本を家から持って来てね」

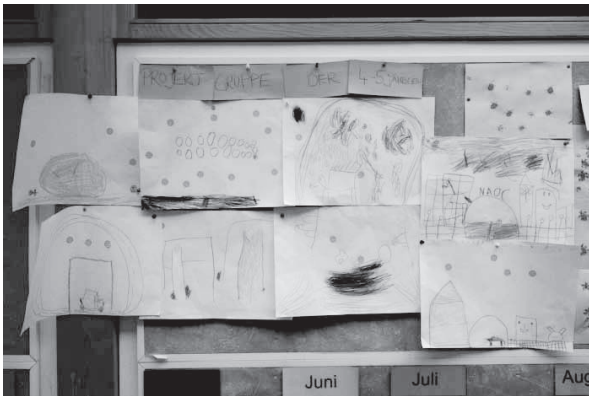


写真 1. 廊下に掲示されたプロジェクトテーマの
投票結果

保育終了後に保育者にインタビューを行った。保育者によると、プロジェクト活動のテーマはいつも子ども達と一緒に決めている。テーマが決定した時には、保育者としてすでに見通しを持っており、今回の活動では空港へ行って終結することを予想しているようだ。つまり、プロジェクト活動が進行する中で、子ども達から様々なアイデアが出てくるが、それらが尽きた時に空港の見学を行ってプロジェクト活動を終了することを見通している。プロジェクト活動は通常1～3ヶ月続く。今回、複数の女兒が動物園をリクエストしていたため、飛行機に決定した時、つまらなさそうな表情をした。しかし、公正な結果なので全く問題は無いと保育者は考えている。

③ グループワークと発表

保育見学の後、3人又は5人グループで25分間、この園の参画の例を模造紙に書き出すというワークを行い、ワーク終了後、全員の中で発表した。各自が様々な場面を観察したので、発表を聞くことによって、この園の保育実践の全貌がイメージできた。

④ 感じ合うワーク

全員で目を閉じて、大きなロープを丸くするというワークを行った。この作業には「共に感じ合う」、「共同で決定する」ことを体感するねらいがある。

⑤ オープン保育の説明

この保育施設は2009年からオープン保育を行っている。この経緯について園長が説明を行った。

⑥ ラーニングストーリーについて

ニュージーランドのラーニングストーリー（学びの物語）を使用している。子ども一人につき、一年に三回の記録をこの形式でとっている。

研修2日目の内容は以下の通りである。

⑦ 保育見学と発表

筆者は子ども対象のヨガを見学した。子ども達7名はヨガマットの上において、真ん中のカーペットには鐘が置いてある。一人ずつ、子どもヨガカードの写真を見て、お話を作りながら、カードの裏のポーズを保育者と一緒にやってみる。例えば、ウサギのポーズ、ネコのポーズ、コブラのポーズ、ライオンのポーズがある。保育者は何度も「もっとゆっくり」と声かけをする。ポーズが続くと休息のポーズをする。ヨガが終了すると、一列に並んで、マッサージを行う。最前列の子どもはぬいぐるみのクマにマッサージをする。順々に後ろの子が前へと入れ替わっていく。マッサージをしてもらっている時、子ども達はとても落ち着いており、心地良い表情であった。互いに優しくマッサージをしていた。保育者のマッサージの仕方が子ども達に共振していくことが理解できた。すべての子ども達が入れ替わって、最後列の子どもが最前列になってクマに優しくマッサージをする。子ども達は再びカーペットに寝転んで、ヨガカードは中心に置かれ、ぬいぐるみのクマは鐘の中に入れられた。保育者は子ども達のポーズについて感想を言う。そして子ども達一人ずつが渦巻き状の板を指でなぞって、感想を言う。

子ども「楽しかった。もっと長くしたかった」

子ども「楽しかった。もう一度鐘を鳴らしたかった」

子ども「よかった。ライオンのポーズが良かった」

子ども「鐘をお腹の上に乗せるのが良かった」

保育者は一人一人の子どもの足元や、子どものリクエストによってはお腹の上や背中の上で鐘を鳴らして、身体への響きが途絶えると、子どもは自分のヨガマットを巻いて、部屋の隅へ持って行って終了した。終始、静かにゆっくりとしたテンポである。



写真2. ヨーガで使用する鐘

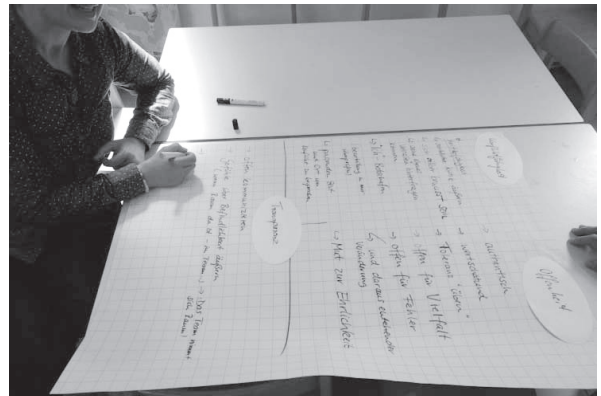


写真3. グループワーク

保育者にインタビューを行ったところ、担当者は子どもヨーガの研修を受けて、自分でもヨーガを行っているという。オープン保育を実施している園の保育者は、このように自分の専門分野を持って、子ども達に提供活動を用意することが特徴である。ぬいぐるみのクマは時に寂しがるとの慰めになるほか、マッサージの時に必要なものでいつもそこにいるという。ヨーガの中での保育者の「この瞬間を味わって」という声かけがこの保育の特徴を表していると言えよう。

保育見学終了後、何を観察したか発表を行った。

⑧ 子ども達との昼食

参加者は保育室で子ども達と給食を食べた。献立はヌードルにハムソースをかけたものがメインディッシュで、きゅうりとキャベツのサラダがあった。

⑨ 感じ合うワーク

参加者が一列になるように椅子に腰掛けて、後方の人から前の人の中背中に指で形を描いて、それを背中の中で感じ取って、最前列の人が紙に描く。これも前述したロープを使った感じ合うワークと類似のものだ。オープン保育は保育者の共同作業が特に重要であるため、共感力を研ぎ澄ますためのワークであった。

⑩ グループワーク

8人ずつのグループで、昼食の様子について意見交換を行った。

⑪ オープン保育とは

最後のグループワークは、提示されたキーワー



写真4. グループワークの発表

ドを複数選んで、これを使って、グループで模造紙にオープン保育の定義についてまとめることであった。筆者のグループは、対立解決能力 (Konfliktfähigkeit)、開放性 (Offenheit)、透明性 (Transparenz) であった。グループワーク終了後、全員の中で発表した。最後に参加者一人ずつ感想を述べて研修会は終了した。

2. まとめ

この研修の特徴は、保育施設で実際に子ども達の様子や保育実践を観察しながら、オープン保育について学ぶことができることである。少人数によるグループワークが多く、その度に保育施設の空いている部屋へ移動して作業をした後、再び研修室に集まるというような空間の移動が見られた。研修を通して、保育者に求められる資質能力として、チームワークと、想像力、及び共感能力であることが明らかとなった。研修会では、参加者同士が感じ合う、触れ合うためのワークが挿入されていたのも大きな特徴であったと言えよう。

3. 参加者アンケート

研修会の最後に参加者 16 名にアンケートを行った。その結果は以下の通りである。

① 保育者歴

参加者の保育者歴は以下の通りである。

3 年未満	2 名
3 年～5 年	4 名
5 年～10 年	0 名
10 年～15 年	5 名
15 年～20 年	1 名
20 年以上	4 名

② 参画の実践

「勤務している保育施設で参画の形態を実践しているか」の質問に対して、15 名が「はい」と回答した。BEP の中で子ども達の参画に言及されてから時間的な経過も見られるため、今や自覚的に導入している園が多いことが影響しているであろう。

③ 参画の形態

「勤務園での子ども達の参画はどのような形態で行われているか」の質問に対しては次のような結果であった。

無回答 1 名

子ども会議 11 名

子ども議会 2 名

その他、自由記述で、朝の会、提供活動の選択、意見アンケートがあげられた。

④ 子ども達の共同決定

「勤務園で子ども達はどのような問題について共同決定しているか」の質問に対して次のような結果となった。

保育室の室内構成 9 名

一日のプログラム 14 名

規則 8 名

献立 7 名

クラスの行事のテーマ 9 名

その他、自由記述で、小グループでの提供活動、祭りがあげられた。

⑤ 保護者の参画形態

「勤務園で保護者はどのような参画を行っているか」の質問について次のような結果となった。
父母集会 11 名

共同決定権のある保護者代表 9 名

その他、自由記述として、父母会の役員、父母会の夕べ、父母カフェ、夏祭りがあげられた。

⑥ 保護者の共同決定

「勤務園では、保護者はどのような問題について共同決定できるか」の質問について次のような結果となった。

祭りや祝典の組織運営 16 名

室内環境 1 名

プロジェクト活動のテーマ 3 名

献立 5 名

⑦ 参画の重要性についての捉え方

「保育施設における参画がなぜ重要なのか」について 4 項目の選択肢を設けて、重要であると思う項目から順番に 1.2.3.4 と番号を付し、全く重要でないものには 0 を付すようにした。集計では順に 1～4 ポイントを配点し、0 と回答した項目には 5 ポイントをつけた。その結果、以下の様な順位となった。

1 位 子ども達の人格を強くするから (16 ポイント)

2 位 保育施設は民主主義を学ぶための基盤でもあるから (28 ポイント)

3 位 子ども達が互いに聞くことを学ぶから (29 ポイント)

4 位 それによってすべての子ども達のニーズをより良く満たすことができるから (35 ポイント)

⑧ 参画の限界

「保育施設における参画の限界はどこにあるか」という質問については、自由記述で回答を依頼した。その結果以下のようなカテゴリーによって類似の回答をまとめることができた。

表 1 保育施設における子ども達の参画の限界

参画の限界	カテゴリー
・日課の決まり ・1 日の流れ ・一部の規則 ・規則	日課や規則 4 件
・大人がしなければならない決定がある。 ・大人も共同決定権を持っている。 ・子ども達 50%・親 50%	大人の決定権 3 件

・子どもに限界を明確にしなければならない。 ・限界やルールが認められないといけない。	ルールや限界が必要 2件
・多くの様々な保育者 ・一部の保育者の姿勢	様々な保育者 2件
・外国人の子ども達にとって言語が理由で時々難しい。 ・多くの個人的なニーズがある。 ・子ども達の集団不適應の場合。	子ども達の様々なニーズ 3件
・参画は保育施設だけで終わらないで、公的な場や社会生活と繋がる必要がある。	その他 1件

上述の通り、その他として「参画は保育施設だけで終わらないで、公的な場や社会生活と繋がる必要がある」と回答している参加者が1名おり、子ども達の参画についてかなり深く理解できていることが推察される。

⑨ 研修参加の理由

「なぜこの研修に申し込んだのか」については、次のような結果であった。

個人的な関心から 12 名

勤務園の職員で共同決定した 5 名

自由記述で、「勤務園がオープン保育なので」、
「勤務園がオープン保育に移行中なので」という回答があった。

⑩ 研修で学んだこと

「研修で学んだ知見の中で何を持ち帰りたいか」と言う質問に対して、自由記述で回答を依頼した。結果をカテゴリーごとに整理して以下に示す。

表 2 研修で学んだこと

研修で学んだこと	カテゴリー
・多くの貴重な新しい考え ・新しい考え ・多くの新しい考えを職員に持ち帰れることが嬉しい	新しい考え 3件
・オープン保育ができたらいと思う ・この園の園長がいつかオープン保育のために少し援助してくれたら嬉しい	オープン保育のコンセプトと方法

・0歳から6歳の年齢混合 ・発達に合ったプロジェクト ・オープン保育が正しいと自信を持った ・アプローチの基礎を理解した ・オープン保育のコンセプトとは素晴らしいチームワークと同僚性であること ・子どもに親切的な雰囲気 ・オープン保育のコンセプトの良い実践 ・オープンで働くことで、一人ひとりの保育者の個人決定が大切にされている	10件
・姿勢と考え方がアルファでありオメガである。全職員がオープンであること ・重要なのは個人の考え方 ・個人的な姿勢 ・新しいことにオープンであること ・変化は自分の中から始まる。 ・子どもに相応しいコミュニケーションと姿勢 ・保育者自身の特徴を活用すること	保育者の姿勢・考え方 7件
・子どもの利益が尊重されること ・子ども達は独自の人間であり、そういった人間として理解されたいと思っていること	子ども観 2件
・保育施設での参画がどのように学校、社会、人生で生き続けることができるかが重要 ・参画は職員間の連携、子どもや保護者に対する姿勢を包括している	参画 2件

研修のテーマが「オープン保育」であったため、オープン保育のコンセプトや方法について学んだと回答する参加者が多かった。しかし同時に、保育者としての姿勢や考え方をあげる参加者が多かったことが注目される。保育方法やコンセプトを学ぶ中で、自らの保育観、子ども観、同僚性を省察することは、あらゆる研修の場において最も重要にされなければならないと考える。

Ⅲ. リューネブルク市立保育施設 B における研修

この研修は、子ども達の参画に関心を持ち、保育実践の改革を検討しているリューネブルク市立保育施設 B で行われた。講師は保育者及び園長経験があり、子ども達の保育施設における参画に関する知識や情報を広める普及者 (Multiplikator) として保育者研修に従事している S 氏である。研修は 2016 年 9 月 19 日 8 時～16 時で、参加者は同園の職員 20 名で、この日は研修のために園を休園していた。この保育施設は病院に隣接しているため、在籍児の 50% が病院職員の子ども達である。1 歳から 6 歳まで 100 名定員の園である。

1. 研修の概要

最初に S 氏が自己紹介をして、参与観察を行う筆者も自己紹介をした。S 氏が研修では互いにファーストネームで呼び合うことを提案すると、全員が合意した。

① 参画の定義

参画の定義についてドイツ社会保障法典、マリア=モンテッソーリ、ヤヌシュ=コルチャック、レッジョ=エミリア保育等、様々な観点から明らかにした。

② 参画に関する実践の紹介

参画に関する実践について視聴覚教材を使用し紹介した。

③ ワークショップ

2 人ペアとなって様々な絵カードを使用して、自らの先入観への気づきのためのワークを行った。その後全員の中で発表した。例えば、一方がカードに描かれている動物のイラストの形の特徴を言って、もう一方の者が想像して絵に描くというワークである。

④ ディスカッション

参加者は子ども達の自己決定が可能である領域を思いつくままに列挙して、項目がカードに書き込まれた。合計 16 種類の項目が出された。その一つひとつについて、全員で検討し「合意できる」「合意できない」に区分した。「合意できる」に残った項目について、参加者達は紙に描かれた「はしご」上に一人ずつ投票した。賛成者が多い項目ほどはしごの上段に上っていく仕組みである。その結果、最も低かったのが「歌遊び」、その後に「園庭でのルール」、「天候に合った服装」と続き、「自分の好きな時にトイレに行くこと」が最も賛成者が多くてはしごの 16 段目にまで上りつめた。

ディスカッションの最終局面で、保育者がなか

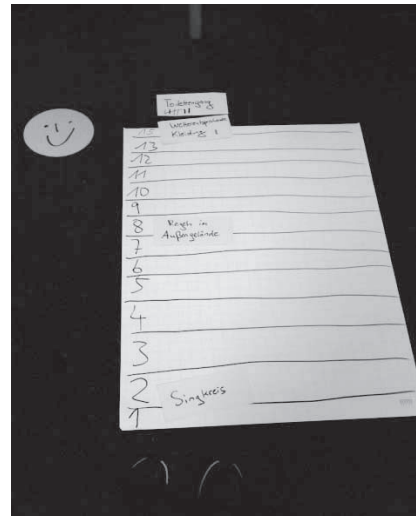


写真 5. 研修で使った合意のためのはしご

なか決断できずにいる時、講師の S 氏は、「保育施設は清潔について学ぶところか？自分で決めることを学ぶところか？」というコメントを入れたのが印象的であった。何人かの保育者達がトイレの清潔な使い方に気を遣って、子ども達に任せることを躊躇していた。講師の発言は保育の本質的なことに気づかせる効果があった。「好きな時にトイレに行くこと」はディスカッションの中で、対象年齢が次第に下がっていった。つまり、当初は年長児のみに認めていたのが、3 歳以上にまで許容範囲が広がった。トイレに行くことには、個人差がある。したがって、一斉に行かせるのではなく、自分で決めることが望ましいことに気づかせることができた。このように子ども達の保育施設における参画は、日常生活の中の小さなことからスタートできることを研修の中で、次第に気づくことができた。

講師 S 氏は最後に次のようにボードに書いて全員で確認した。

「家族グループ (3 歳未満児対象のクラスのこと - 筆者による) で保育されていないすべての子ども達は、いつトイレに行くかを自分で決める権利を持っている。(2016 年 10 月 27 日から適用)」

2. まとめ

この研修は子ども達の参画に関心を示しているが、未だ意識的に実践を行っていないため、まず参画について基本的なところから学ぶことを希望している保育施設において行われた。研修の特徴は参加者の錯覚や思い込みに気づかせ、日常生活において当たり前であると思っていることを一度

振り返ってみることを促すことに特徴があった。ワークも前半はこの点に焦点化していた。保育施設における参画については、最初から高度なことを目指すのではなく、日常生活における基本的なこと、今回は「自分の行きたい時にトイレへ行くこと」からスタートすることに気づかせる内容であった。子ども達の参画は保育者による日常の保育への気づきから始まることが明らかとなった。

3. 保育者アンケート

ミュンヘン市立保育施設において実施したのと同様の内容のアンケートを参加者に行った。その結果は以下の通りである。

① 保育者歴

参加者の保育者歴は以下の通りである。保育者歴 20 年以上の者が 8 名いるのがこの園の特徴である。

3 年未満	2 名
3 年～5 年	3 名
5 年～10 年	2 名
10 年～15 年	2 名
15 年～20 年	2 名
20 年以上	8 名

② 参画の実践

「勤務している保育施設で参画の形態を実践しているか」の質問に対して、「はい」と答えた者が 18 名で、「いいえ」が 1 名であった。自由記述として、以下のような回答が見られた。

「しかし小規模で、不定期で」

「かなり以前から小規模で」

「この 2-3 年」

「かなり以前からだ、自覚なく」

「まったく小規模で」

「時々自覚なく」

自由記述によって、この園が参画の実践について何となく、意識化できないままに行ってきた現状が明らかとなった。

③ 参画の形態

「勤務園での子ども達の参画はどのような形態で行われているか」の質問に対しては、自由記述として記載する回答者が多かった。

参画の形態はない。5 名

子ども会議 1 名

子ども議会 0 名

自由記述として以下のような記述が見られた。
「子ども達に小さなことを決めさせる。例えば、二つのうちどちらかを選択させたり、子どもがどちらが いいかを保育者が確認する。」

「朝の会や集まりの会」

「集まりの会や小グループでの不定期な話し合い」

「プロジェクトの中で共同で決める」

「朝の会で歌を選ぶ」

「賛否の意思表示、多数決」

「1 日の流れの中で決定する」

「提供活動を決める、参加をするかしないかを決める」

「どの歌を歌うか、どのお話をしてもらおうか」

「誕生日会」

「子どもへのアンケート」

「クラスの中の集まり」

④ 子ども達の共同決定

「勤務園で子ども達はどのような問題について共同決定しているか」の質問に対して次のような回答となった。括弧内には回答者のコメントが付されていた。

保育室の室内構成 2 名（絵をかけたり、部分的に）

一日のプログラム 12 名（自由な時間に今日はどこで遊ぶかを決める。部分的に）

規則 4 名（部分的に）

献立 0 名

クラスの行事のテーマ 2 名（部分的に）

その他、自由記述で、「どの歌を歌うか」「自由な時間に、どこへ行くか」「例えば、プロジェクトを作ることについて」といった回答が見られた。

⑤ 保護者の参画

「勤務園で保護者はどのような参画を行っているか」の質問について次のような回答となった。

全くなし 1 名

父母集会 12 名

共同決定権のある保護者代表 11 名

その他、自由記述として、「保護者代表による情報提供」「フイードバックシート」「いくつかの行事で」「必要に応じて、又は行事の際に」「PTA の夕べのクラス内での合意」「PTA の夕べ」といった回答が寄せられた。

⑥ 保護者の共同決定

「勤務園では、保護者はどのような問題について共同決定できるか」の質問について次のような回答となった。

祭りや祝典の組織運営 15 名（部分的に）

室内環境 0 名

プロジェクト活動のテーマ 2 名（プロジェクトに参加できる）

献立 0 名

自由記述として、「親と子ども達とのクラス内活動」「遠足」「全くなし」と言った回答が寄せられた。

⑦ 参画の重要性についての捉え方

「保育施設における参画がなぜ重要なのか」について、重要であると思う項目から順番に 1,2,3,4 と番号を付し、全く重要でないものには 0 を付すようにした。その結果、以下の通りとなった。集計については前述したミュンヘン市立保育施設 A と同様にした。

2 位以下が僅差であることから、参加者にとって参画の重要性に対する明確な理解は未だ途上であることが推察される。

1 位 子ども達の人格を強くするから（33 ポイント）

2 位 保育施設は民主主義を学ぶための基盤でもあるから（49 ポイント）

2 位 それによってすべての子ども達のニーズをより良く満たすことができるから（49 ポイント）

3 位 子ども達が互いに聞くことを学ぶから（50 ポイント）

⑧ 参画の限界

「保育施設における参画の限界はどこにあるか」と言う質問については、自由記述で回答を依頼した。その結果以下のようなカテゴリーによって類似の回答をまとめることができた。

表 3 保育施設における子ども達の参画の限界

参画の限界	カテゴリー
・時間の制限 ・日課の枠組み ・多くの枠組みが前もって決まっている（例えば、いつ、何を食べるか） ・枠組み－1 日の流れ ・日課	日課や規則 5 件

・クラス規模 ・保育者不足 ・親	保育条件 3 件
・同僚 ・保育者の互いの合意	保育者の合意 2 件
・共同決定と規則を守ることのバランスが大切 ・他の子ども達の気持ちや要望に関わる場合	子どもへの適切な指導 2 件
・危険になりそうな時 ・子どもにとって危険な時 ・危険域の行動 ・身体的健康に関わる時 ・天候にあった衣服の調節 ・子どもの健康が危険であるとき ・危険な場合 ・私がそれを危険であると思っている個人的な決定 ・子どもの健康を守らねばならない時 ・子どもを危険から守らねばならない時	危険 10 件
・ひょっとすると自分の子ども時代に学んだことの経験が私自身を麻痺させているかもしれない	保育者の個人的な判断 1 件

⑨ 研修参加の理由

「なぜこの研修に申し込んだのか」については、次のような結果であった。

個人的な関心から 1 名

勤務園の職員で共同決定した 19 名

この研修会は園内研修であることから、「共同決定した」と回答する参加者が当然多かったが、「園長が決定したから」と補足する参加者も複数いた。

⑩ 研修で学んだこと

「研修で学んだ知見の中で何を持ち帰りたいか」と言う質問に対して、自由記述で回答を依頼した。結果をカテゴリーごとにまとめて以下に示す。

表 4 研修で学んだこと

研修で学んだこと	カテゴリー
・参画の意味と異議申立ての権利 ・新しい刺激と知見、違った様にやってみることは面白い。	参画の意味

<ul style="list-style-type: none"> ・参画の意味がもっと分かった。いくつかの事柄は私の仕事に流れ込むだろう ・参画は子ども達がすべてのことを自分で決めることではない。私たちは同伴し促進しなければならない。 ・モンテッソーリ教育以上だ。 ・達成するために小さな目標を設定すること ・コンセンサスを見つけること。小さなテーマから始めること ・もっと参画を ・参画はいつも個人的に適用されなければならない。日常に同伴し、形成することができる。参画は子ども達の発達とクラスの共同生活にとって重要な構成要素だ。子ども達は自分の問題解決のための戦略を発見し、使用できるし、そうあるべきだ。 ・すべてのことを繰り返し再確認すること。子ども達を彼らの決定に日常の状況の中でもっと参加させること。 ・さらに実践することが民主主義のために重要だ。各人の個性を強化する。その方法は子ども達をよりよく理解することを教えてくれる。もし、皆がそれを理解したら、共に生きることの問題がより少なくなる。 	11 件
<ul style="list-style-type: none"> ・古い規則の熟考、様々なテーマへの自分の見方、同僚との取り決め ・多くのディスカッションをする長い道のりだ。古い規則を固守することが多い。個性が少ない ・参画はすぐに実現できない。必要なのは保育者の考え方の変革 ・すでに少し高齢で、長い間勤務している同僚が参画へと活気づけられること 	保育者の姿勢・自己省察 4 件

<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達のニーズや感情に対してもう少しオープンになること ・子ども達のための一層の考え、新しい原則が作られる。子ども達の幸せのために、規則をもっと作るのか、あるいは減らすのか。 	子ども観 2 件
<ul style="list-style-type: none"> ・様々な賛否の意思決定と司会の形態、人々を考えさせる問題設定 ・私の仕事及び職員チームの仕事のいくつかの側面について考え、変えることができる実践例 	研修の方法 2 件

Ⅳ. ドイツの保育者研修の特徴

ドイツにおける二つの保育者研修の実際について明らかにした。ミュンヘン市立保育施設で行われた研修の特徴は「オープン保育」について実際に実践している園で実体験することができることである。オープン保育を実践するためには、保育者のチーム保育が必要となってくるため、保育者の共感性と保育者相互の連携が強調される内容であった。リューネブルク市立保育施設の研修は、保育者自身が自らの思い込みや偏見に気づくためのワークが研修の前半にふんだんに取り入れられ、その上で日常の保育の省察が行われた。園内研修であったため、参加者全員が自分達の園の保育の振り返りを行うことができた。参画は日常の小さな一歩からスタートできることを意識化させる内容であった。どちらの研修でも共通しているのは、参加者達のグループワークが中心であることだ。前述したように、子ども達の参画の前提条件は大人達の考え方や関係性である。研修の受講においても決して受身でなく、終始主体性が求められた。子ども達の参画を支える保育者に望まれる資質能力とは、まさに保育者自身の参画的態度であることが研修を受ける姿勢によっても明らかとなった。

ここで注目できるのは、前者と後者の保育者達の捉える参画の限界についての考え方の相違である。前者の参加者達のほとんどがすでに勤務園で子ども達の参画に関する実践を進めている。後者の園では、多くの回答者が記述しているように、未だ子ども達の参画については無意識的に行っており、しかも子ども達に許容されているのは絵本や歌選び程度である。両者の保育者に決定的に違うのは、後者が参画の限界に「危険」を上位に置

いているのに対して、前者の参加者は「危険」について全く言及していないことである。前者の研修会の参加者の何人かが、参画の限界として、一人ひとりの子どものニーズに応えることをあげていることから、参画とインクルージョン保育の理想と現実の間で格闘する保育者の状況を推察することができる。後者の保育者達は未だ、自らの子ども観や日常の保育の見直しの段階に留まっており、保育者集団としての共通理解に到達していない。この点が参画の限界を具体的にイメージできない原因であろう。そのため不測の事態や仮想の危険の前で躊躇しているのであろう。保育施設における子ども達の参画を実行する際、危険や限界については当然、保育者集団で綿密に議論されなければならないことは当然である。子ども達の権利として何が許容でき、何が許容できないのかについて、合意が作られることが参画のスタートなのだ。

V. 日本の保育者研修に対する示唆

筆者は2016年10月23日に教員免許状更新講習「ドイツの幼児教育から子どもの自己決定を考える」において九州地区の保育者32名対象に「ドイツの保育施設における子ども達の参画」について理論と実践を紹介した上で、グループワークで日常の保育の振り返りと課題について話し合いの機会を設けた。その際、研修会の最後の場面でドイツの研修会で行ったアンケートの日本語版への回答を依頼した。

調査にあたっては、研究概要、研究協力の中断や辞退の自由、データは研究目的でのみ使用すること等について口頭及び書面で説明し、調査協力者の自由意思のもと研究協力の同意書への署名を得た。

参加者の保育・教育歴、及び学校種は以下の通りであった。

3年未満	0名
3年～5年未満	2名
5年～10年未満	9名
10年～15年未満	9名
15年～20年未満	6名
20年以上	6名

幼稚園勤務 17名
保育所勤務 8名
認定こども園勤務 2名

小学校勤務 1名
特別支援学校 1名
その他 3名

アンケート結果から、「保育施設における参画の限界はどこにあるか」という質問に対する自由記述による回答を抽出し、カテゴリーごとにまとめて以下に紹介する。

表5 保育施設における子ども達の参画の限界

カテゴリー	保育方針や行事 14件
	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと直接関わる個人の保育士の考えだけでなく、保育方針を変えることは難しいと思いました。 ・園での決まりや方針など、大きい幼稚園であればあるほど、足並みを揃える必要が出てきて、自分のクラスだけちゅうことができない。 ・今の保育現場ではその日その日にしないといけないことが決まっているので、その壁に当たった時限界だと思う。 ・危険を伴うかどうかで決まってくると思うが、園の方針で園長の考えの中で限界を作られると、そこで終わってしまう。 ・それぞれの園の考え方や方針によってできることは全く違ってくると思います。また、保育者一人ひとりの保育観、考え方がどのように変えられるか、変わるかによっては限界の幅が広がったり、小さかったりすると思います。 ・保育者、園の考え方 ・工夫によっては限界はないと思うが、教育方針に触れてくるのが行事に関わってくると、園で決定していることは変えられない、その時に限界を感じる。 ・園全体の活動や行事に関わることは、他職員、園長、保護者の理解がいる。 ・園の方針や行事など。しかし、限られた中での保育者の心構えや考え方によって、あらゆる方法は可能だと思います。 ・わかりません……。行事がネックのように思います。 ・園の方針 ・園の行事の多さ ・園の行事のための活動 ・園の方針から大きくずれてしまう時
カテゴリー	保育条件 5件
	<ul style="list-style-type: none"> ・園での立場、置かれている環境 ・建物の立地条件、保育者の数、費用 ・保護者からの要望の多さ。 ・日本の幼児教育、集団保育の枠、集団サイズの大きさ ・政治体制、文部科学省から出る指針等
カテゴリー	危険 5件
	<ul style="list-style-type: none"> ・安全管理です。保育者が危険などを予測し、子ども達が安心して過ごせる環境を作っていないといけないと思います。

<ul style="list-style-type: none"> ・危険が伴うとき。 ・危険物、危険人物。昔の子供より身体的にもろくなった。 ・安全が保たれるかどうか面に面した時。 ・危険なこと、他者を傷つけることは限界と考えます。子どもの生きる力となる自己決定等は、自尊心を大切にすることとして、あまり限界を決めず取り組んでいきたいと思います。
カテゴリー 集団生活、ルール 7件
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達の発達段階によって違う部分があると思いますが、主となる活動、時間配分などは、大人または保育者でなければバラバラの活動になってしまうのではないかと思います。 ・全部決めてしまうと、好きなことだけを行ってしまうことになるので、課題やルールというハードルを与えてあげる部分とのバランスだと思います。特支の生徒の場合、同級生や他人の気持ちや考えをわかることができない子も多いので、トラブルを起こさない範囲でのことだと思います。 ・集団生活なのでルールも必要かと、たまに思うことがあります。特に年長さんは....。 ・集団生活の中で、自己決定できる場合と、周りに合わせて動く場合があると思います。みんなで何か一つのことをする時には、自分の意思を伝えつつ、周りの意見も聞くことが大切だと思います。 ・全体のまとまりがなくなってきた時。(自由を飛び越え、自分勝手が強くなってきた時) ・自由になりすぎない線引き(相手を傷つける、自己中心的、わがまま)
カテゴリー 小学校接続 2件
<ul style="list-style-type: none"> ・現状では小学校就学してしまうと、そこが限界だと思います。今の日本の小学校には、連携や子どもの自由が教師の業務量で後回し、または、無くされています。交流会を持つように園側から努力していますが、現状の小学校カリキュラムの中には組み込める余裕がないです。 ・現状の日本の教育では「自由」よりも決まりの中で行動することが多く、いつまでも自己決定に任せてばかりいては、小学校や中学校での学習や生活に支障が出てくるので、「決まりの中の自由」について知らせていかなければいけないと思う。
その他 3件
<ul style="list-style-type: none"> ・限界はないかなと思います。 ・子ども達の自己決定や共同決定は、保育者のサポートによって変わってくると思う。 ・限りなくあると思います。

更新講習の参加者の勤務園の保育方法や内容は実に多様であった。子ども達の自己決定・共同決定をほとんど意識化していない園から、乳児期からの自己決定をすでに意識して実践している園まで様々であった。参画の限界についての回答に日本の保育文化、保育者の置かれている状況が反映されている。保育者が個人として行いたい保育が

あっても、勤務園の方針によって不可能であると記述する保育者が圧倒的に多かった。とりわけ行事によって日常の保育が圧迫されがちな日本の園の置かれた状況が回答に反映している。危険に関しては、未だ子ども達の参画を実践していない段階では、誰しもが不安に思うコメントであり、前述したリューネブルク市立保育施設Bの結果と似ている。参画の限界に集団生活への適応への不安を記述する回答者が多数いたことは、日本の学校文化の特徴を反映している。子ども達の参画は重要だが、わがままになっては困るということであろう。子ども達の参画とは、民主主義を学ぶことが究極的な目標で、初期の政治教育のスタートでもある¹⁰。子ども達は参画を通して、議論を通しての折り合いのつけ方をも学んでおり、現代の幼児教育で重視されている協同的な学びを促進するための重要な鍵なのである。

今後の課題とは、保育者研修を通して保育者が当たり前だと思っていた日常の保育を見直し、自らの保育観や子ども観を省察することのできる研修を重ねることによって、日本の保育文化をも見直すきっかけを作ることである。ドイツの保育施設における子どもたちの参画に関する実践の紹介は、その際の有効なツールとなることを筆者は研修を通して理解することができた。子どもたちの保育施設における参画を可能にするための土壌づくりの一つに、保育者研修があることは間違いない事実なのである。

謝辞

本研究ではミュンヘン市教育・スポーツ課の皆様、ミュンヘン市立幼稚園一級保育者ベルガー有希子氏、元ミュンヘン大学教授シュベック・ハムダン博士、キール専門大学教授ラインガルト・クナウアー博士、保育者研修講師ユリウス・ゼーリング氏、及び保育施設の教職員諸氏にご協力いただいた。ここに感謝を表する。

付記

本研究はJSPS 科研費 15K04304 の助成を受けたものである。

註

¹ 船越美穂 (2012) 「幼児期における民主主義への教育 (Ⅱ) —『バイエルン陶冶-訓育計画』における『参加』(Partizipation) の思想と実践—」『福岡教育大学紀要第 61 号第 4 分冊』77-88。

船越美穂 (2013) 「幼児期における民主主義への教育 (Ⅲ) — Willy-Althof-Kindergarten における実践」『福岡教育大学紀要第 62 号第 4 分冊』 95-107。

船越美穂 (2015) 「幼児期における民主主義への教育 (Ⅴ) — シュレースヴィヒ = ホルシュタイン 州の保育施設における子ども達の参画 —」『福岡教育大学紀要第 64 号第 4 分冊』 153-162。

船越美穂 (2016) 「ドイツの保育施設における子ども達の参画 — 多様性の教育を観点として —」『福岡教育大学紀要第 65 号第 4 分冊』 73-84。

船越美穂 (2017-1) 「ドイツの保育施設における移民の背景を持つ子ども達の参画 — 言語教育を観点として —」『福岡教育大学紀要第 66 号第 4 分冊』, 59-65。

船越美穂 (2017-2) 「ドイツの幼児教育施設における子ども達の参画 (Ⅳ)」『日本保育学会第 70 回大会発表要旨集』 452。

船越美穂 (2017-3) 「ドイツの保育施設における移民の背景を持つ母親達の参画 — 異文化間対話サークルの取り組みを観点として —」『日本教育学会第 76 回大会発表要旨集録』 360-361。

² Bayerisches Staatsministerium für Arbeit und Sozialordnung, Familie und Frauen &

Staatsinstitut für Frühpädagogik (2013): Der Bayerische Bildungs- und Erziehungsplan für Kinder in Tageseinrichtungen bis zur Einschulung. Berlin: Cornelsen. (以下, BEP と略), S. 394.

³ BEP, S. 394.

⁴ BEP, S. 394.

⁵ BEP, S. 394.

⁶ BEP, S. 394.

⁷ BEP, S. 394.

⁸ BEP, S. 395.

⁹ 筆者がこれまでフィールドワークを行った保育施設のほとんどがオープン保育を実施していた。クラス別保育を解体したオープン保育では、子ども達の活動、場所、遊びのパートナー等の選択幅が広がり、自己決定の機会が増える。保育現場に、子ども達の参画が浸透するのに従って、オープン保育を実施する園が増加しているのは、子ども達の権利保障が背景となっている。また、オープン保育では保育者達は協同で子ども達の保育にあたるため、保育者間の連携が一層求められてくる。

¹⁰ BEP, S. 390.

